

リバーズ型人工肩関節

2014年4月に日本でリバーズ型人工肩関節（以下、RSA）が使用可能となってから5年が経過した。2018年3月までに日本人工関節学会のレジストリーに登録されたのは3,851例、その後1年以上経過しているので実際には5,000例を超える手術が行われたと思われる。5年、5,000例という区切りは、改めて我々の経験を振り返り、RSAの知見を整理するのに適した時期だと考え、本特集を企画した。

執筆をお願いしたのは、RSAの知識・経験に秀で、誰もが我が国のリーダーと認める気鋭の先生方である。まずRSAの講習会における講師の経験も深い橋口 宏先生にRSAの歴史を語っていただいた。変遷を知ることによって現在のRSAの意義や限界が理解できるのではないかと思う。次いで日本肩関節学会リバーズ型人工肩関節運用委員会の委員長である山門浩太郎先生に、現在の診療ガイドラインの要点を述べていただいた。なぜこのガイドラインが必要であったかをご理解いただき、いっそう適切なRSAの実施にお役立ていただければと思う。

現在、本邦で使用可能なインプラントは8機種あり、それぞれデザイン・特徴が異なる。どのようなことを考えて機種選択をしていくべきか、大泉尚美先生に解説をお願いした。また標準的な手術の手順と技術的ポイントを松村 昇先生に、RSAで最も問題となる関節窩骨欠損への対応策を林田賢治先生に述べていただいた。他の手術に比べてRSAでやや多いとされる合併症を未然に防ぐことは、臨床的に極めて重要である。この点については設楽 仁先生に解説をお願いした。

RSAの最も多い対象疾患は腱板断裂関節症と広範囲腱板断裂である。これに対するRSAの適応、成績、問題点について落合信康先生に解説をお願いした。その他の対象疾患のうち、骨折・脱臼症例に対するRSAについては伊崎輝昌先生に、関節リウマチに対するRSAについては内藤昌志先生に、それぞれ解説していただいた。最後に永井宏和先生に、今までのRSAの成績を踏まえて本手術が将来進むべき方向性を示していただいた。

原稿を拝読したところ、どの項目も大変力のこもった論説であり、執筆者の強い熱意が伝わってきて感激した。本特集が読者の皆様にとって価値あるものとなり、新たなRSAの世界が開かれていくことを期待している。

（玉井和哉）